

児童が主体的に活用し、よりよい社会の在り方を考えることができる 副読本「かわさき」の作成・活用に関する研究

—問題解決的な学習に、より一層対応した副読本「かわさき」をめざして—

郷土資料編集研究会議

寺尾 春菜¹

川田 照子²

岩瀬 美保子³

清野 貴史⁴

要 約

副読本「かわさき」は昭和30年の発刊以来、主に小学校社会科の地域学習で活用されてきている。現行の学習指導要領の内容に合わせ、2023年度には全面改訂版の発刊が予定されている。学習指導要領解説社会編では問題解決的な学習の充実を通して、資質・能力を育成することが示されている。また、現行副読本の教師の活用状況に関するアンケート結果から、高学年で使用している割合が低いことがわかった。これらのことから、次期副読本は、児童に新しい時代に求められる資質・能力を育めるものであること、教師が授業で活用しやすいものであることが必須であると考え、主題・副題を設定した。

現行副読本の特徴や設定した児童が副読本を主体的に活用する姿をもとに、編集方針を決定した。そして、学習指導要領の内容と対応させながら、副読本で取り上げる川崎市に見られる社会的な事象を検討し、全体構成を考えた。次期副読本は章立てを学年ごととし、問題解決的な学習過程に対応したページを現行よりも増やして作成を進めていくこととした。ページ試案の作成は、学習場面に合わせたページ構成、キャラクターによる吹き出しの活用、副読本とICTを関連させた活用に重点を置いて進めた。

ページ試案を用いた検証授業では、児童が資料を関連付けて読み取ったり、疑問をICTを用いて調べて解決したりする姿が見られた。授業後に実施した児童アンケートからも、今回作成した試案は概ね問題解決的な学習に対応しており、児童が主体的に活用できるものになっていることがわかった。

児童が主体的に活用するためには、児童の発達の段階に合わせた資料を精選することやページ構成の工夫が有効であることが分かった。今後は、冊子として完成した状態で活用しやすいものになっているかを引き続き検証すること、教師用指導資料の作成を行っていくことが必要である。

キーワード：副読本、主体的に活用、問題解決的な学習過程、副読本とICTの関連

目 次

I 主題設定の理由・・・・・・・・・・	6	III 研究のまとめ・・・・・・・・・・	22
1 これからの時代に求められる副読本とは	6	1 今回の研究で見えてきたこと	22
2 研究主題について	9	2 今後の課題	23
II 研究の内容・・・・・・・・・・	10	3 終わりに	23
1 次期副読本の編集方針	10	参考文献	24
2 ページ試案の作成	12	指導助言者・研究協力者	24
3 ページ試案に基づいた検証授業の実施	15		

¹川崎市立平間小学校総括教諭（長期研究員）

²川崎市立住吉小学校教諭（研究員）

³川崎市立大谷戸小学校教諭（研究員）

⁴川崎市立麻生小学校教諭（研究員）

I 主題設定の理由

1 これからの時代に求められる副読本とは

(1) 副読本「かわさき」とは

副読本「かわさき」(以後、副読本)は、1955(昭和30)年の発刊以来、主に小学校社会科(以後、社会科)の地域学習の教材・資料として、また川崎市の姿や取組を市民に伝える市民読本として、8回の全面改訂を経て今日まで受け継がれてきている(図1)。現行副読本は平成20年告示の学習指導要領の内容を反映させて全面改訂を行い、2013(平成25)年度から使用されている。令和2年度より小学校では平成29年告示の学習指導要領(以後、学習指導要領)が全面実施されており、その内容を反映させて全面改訂された副読本の発刊が2023(令和5)年度に予定されている。

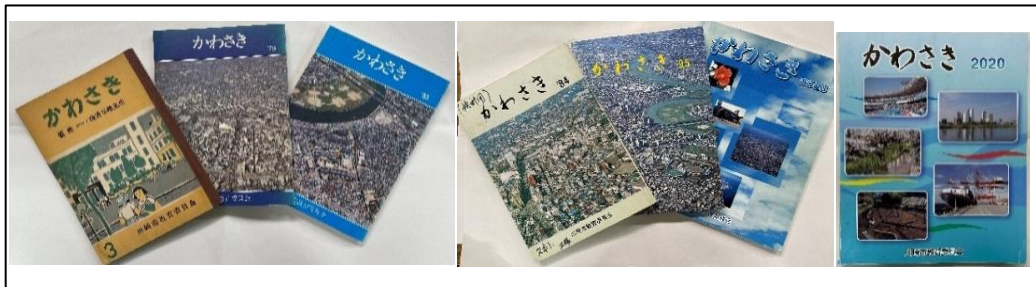


図1 副読本の変遷

(2) 現行副読本の特徴

現行副読本は、平成20年告示の学習指導要領で示された「生きる力」を育む一手段として、問題解決的な学習が充実するよう、その意図を反映させた編集が行われている。具体的には、問題解決的な学習に対応した三つの活用方法(問題解決的な学習過程に沿ったページ・問題解決的な学習を補助するページ・問題解決的な場面で役立つページ)で全体構成がされている。その中の、問題解決的な学習過程に沿ったページは、三つの場面(問題を見つけるページ、調べたり考えたりするページ、学習したことをまとめるページ)で編集されている。こうした問題解決的な学習過程に沿ったページ構成になっているのは、「第7章小泉次大夫 用水を開く」、「第8章未来に向かって『1項 環境に優しい社会をめざして』」の2つである。また、章立ては「地理」「産業」「情報」「歴史」「くらしと文化」「未来に向かって」と分野ごとになっており、学習で活用できる学年を目次で示すなど、社会科の学習で活用できる工夫がされている。

一方、内容が平成20年告示の学習指導要領に合わせたものになっており、現行の学習指導要領の内容と合っていない章もある。例えば、「第2章7つの区をたんけんしよう」は、7区全ての情報が詳細に掲載されており、市全体を身近な地域として捉えたり、市の概略を理解したりするのが難しい構成になっている。その他にも「第4章情報と私たちのくらし」は、情報ネットワークを活用して公共サービスの向上に努めている事例を扱っているが、現行の学習指導要領では情報や情報通信技術を活用して発展している産業を扱うように示されている。紙面構成の課題としては、1ページに掲載されている情報量が多かったり、吹き出しの役割が明確でなかったりし、児童の発達の段階によっては活用することが難しいページがあることである。

(3) 学習指導要領より

① これからの時代に求められる資質・能力

副読本が社会科の地域学習の教材であるということは、学習指導要領の内容に沿った編集を行っていく必要がある。学習指導要領解説総則編の改訂の経緯では、これからの時代は厳しい挑戦の時代、予測

困難な時代とされ「一人一人が持続可能な社会の担い手として、その多様性を原動力とし、質的な豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を見いだしていくことが期待される」¹とされている。児童には社会の変化を前向きに受け止め、主体的に社会の変化と関わり合いながら、自ら考え、行動していく力が必要となり、学校教育には教育を通してそのために必要な力を育てていくことが求められている。これらのことから、次期副読本は、社会の在り方について考えて行動していく児童を育てられるものにしていく必要があると考える。

②社会科の改訂内容

社会科では、教科の目標²である「公民としての資質・能力の基礎」を育成するために「課題を追究したり解決したりする活動」すなわち「問題解決的な学習過程を充実させること」が示された。問題解決的な学習³は、従前から行われてきたものであるが、学習指導要領では一層の充実が求められている。そして、問題解決的な学習過程の充実を図る際には、主体的・対話的で深い学びを実現するような学習過程の工夫⁴を考えることとされている。

また、これまでは一つにまとめて示されていた第3・4学年の内容を分けて示し、第3学年では市を中心とした地域社会の内容、第4学年では県を中心とした地域社会の内容をそれぞれ扱うよう改善が加えられた。学年ごとに扱う地域を広げていくことで、段階的に資質・能力を育成するという点が大切にされている。だが、実際に児童が手にする教科書は全国的な視点で作成されており、必ずしも自分たちの身近な地域が事例として扱われているわけではない。中川(2001)は「社会的事象の一般化、概念化を図るという点では有効であるが、子どもたちの興味・関心、発達段階を考慮すると教科書活用の限界が感じられる。」⁵と教科書活用の有効性と限界について指摘している。特に「自分たちの市」が学習材となる第3学年の児童にとって、他自治体の事例から学習への興味・関心や見通しをもつことは容易なことではない。そこで、教科書に代わる地域の副読本が欠かせないものになってくる。児童が主体的に問題解決的な学習に取り組むためにも、副読本の作成は必須であるといえるだろう。

(4) キャリア在り方生き方教育の視点から

副読本では過去・現在の川崎市の姿や人々の営みを事例として取り上げる。児童にとって身近な地域である川崎市が教材となることで、「地域を学ぶ」「地域で学ぶ」「地域に学ぶ」「地域を築く」ことが可能となる。副読本を通して地域とのつながりを意識しながら学習を進めていくことで、自分たちの地域である川崎市に対する誇りや愛情が育まれていくと考える。これらはキャリア在り方生き方教育の三つの柱である「自分をつくる」「みんな一緒に生きている」「わたしたちのまち川崎」の視点に含まれるものと本研究では捉えた。そのため、第3学年だけでなく他学年の学習であったり、教科等横断的な視点で川崎市を教材・資料として扱えたりする副読本にしていく必要がある。

¹ 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説総則編』p. 1

² 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説社会編』p. 17 第1節社会科の目標 - 1教科の目標「社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力の基礎を次のとおり育成することを目指す」

³ 学習指導要領社会での問題解決的な学習とは「単元などにおける学習問題を設定し、その問題の解決に向けて諸資料や調査活動などで調べ、社会的事象の特色や相互の関連、意味を考えたり、社会への関わり方を選択・判断したりして表現し、社会生活について理解したり、社会への関心を高めたりする学習などを指している。」p. 20

⁴ 学習指導要領では「児童が社会的事象から学習問題を見だし、問題解決の見通しをもって他者と協働的に追究し、追究結果を振り返ってまとめたり、新たな問いを見いだしたりする学習過程などを工夫することが考えられる」としている。p. 20

⁵ 中川通彦他「郷土資料の作成と活用に関する研究」平成13年度研究紀要第15号川崎市総合教育センターp. 167

(5) 現行の活用状況について

学習指導要領で問題解決的な学習過程を充実させることについて改めて示されたが、前述したように、現行副読本では第4・5学年の学習を対象として問題解決的な学習過程に対応したページが設けられている。では、現行副読本は実際の授業でどの程度活用され、問題解決的な学習で使用されているのだろうか。市内小学校教師を対象としたアンケート調査を年度当初に行い、研究の方向性を探っていくこととした。

アンケート結果(図2)を見ると、中学年の学習で使用している教師の割合が高いことがわかる。また、川崎市立小学校社会科教育研究会の常任委員(以後、常任委員)の教師は高学年でも使用している割合が高いが、その他の教師は学年が上がるにつれて使用している割合が低くなっている。特に、問題解決的な学習過程に対応したページがある第5学年が17.5%と低くなっている。実際にその他の教師のおよそ42%が「問題解決的な学習過程に対応したページがあることを知らない」と答えている(図3)。自由記述では「どんな情報がどこに載っているのか把握していないので、活用しきれていない」「資料集的に使っていて、作成側の意図までは考えられていない」「教師

によって活用状況に差があり、高学年まで引き継がれていないことがある」といった意見が出ていた。このことから、現行副読本は、教師の活用状況、つまり授業での活用に課題があると考えた。副読本をどれだけ児童が活用しやすい内容に編集をしても、教師が授業で活用しないのであれば児童が活用する機会も大きく減るだろう。教師が授業で活用する場面を増やしていく必要がある。そのための方法として、本研究会議では「副読本の編集意図や授業での活用方法を今以上に周知していくこと」「授業で使いやすい内容や紙面構成を意図して編集を行っていくこと」「教師用指導資料を充実させること」といった意見が挙げられた。

副読本を活用している児童の様子としては「写真が大きく掲載されていたり、資料がたくさん掲載されていたりするので、自分で調べる際の参考として使っている」「教科書だけではわからない地域の情報が書かれているので、より身近な情報に嬉しそうな反応をしている」などが挙げられていた。現行副読本で工夫されている資料提示の仕方や写真資料の豊富さが児童の学びを支援していることが分かった。

以上のことから、次期副読本は教師がより授業で活用できるものに、児童にとっては現行副読本のよさを受け継ぎ、さらにこれからの時代に求められる資質・能力を育成できる副読本を作成していく必要があると考えた。

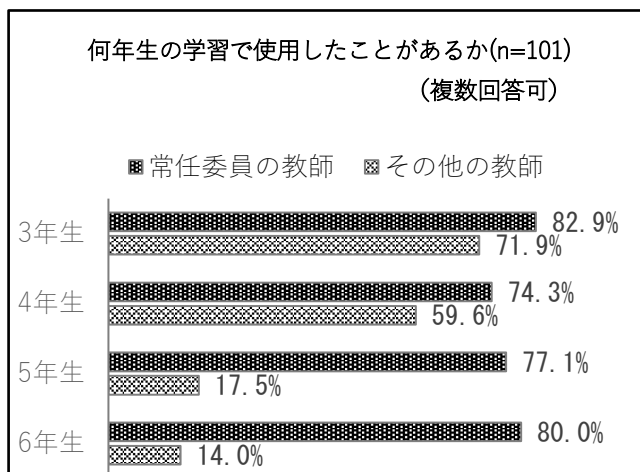


図2 副読本「かわさき」に関するアンケート結果Ⅰ

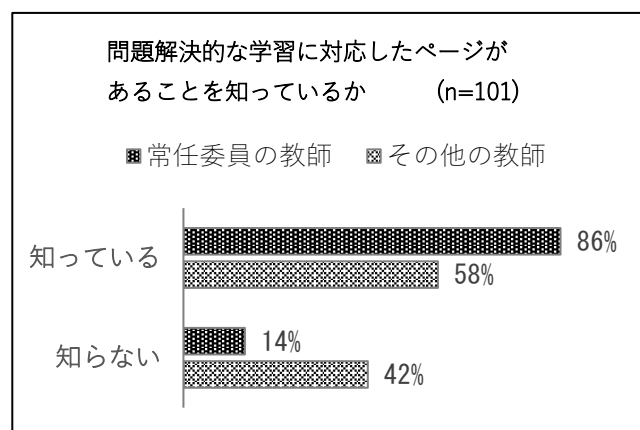


図3 副読本「かわさき」に関するアンケート結果Ⅱ

2 研究主題について

(1) 副読本で育成を目指す資質・能力

学習指導要領では、「生きる力」をより具体化し、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力を「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の三つの柱で示している⁶。副読本は、地域社会である川崎市を事例として扱う。社会科で育成を目指す「公民としての資質・能力の基礎」の公民を川崎市民として捉え、副読本を通して育成を目指す資質・能力を考えることとした。『公民としての資質・能力の基礎』は『知識及び技能』、『思考力、判断力、表現力等』、『学びに向かう力、人間性等』の三つに沿って整理した小学校社会科の目標（1）から（3）⁷までに示す資質・能力の全てが結び付いて育まれるものであると考えられる。⁸とされている。そこで、副読本で育成を目指す資質・能力を考え、それをもとに「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で整理をした（図4）。

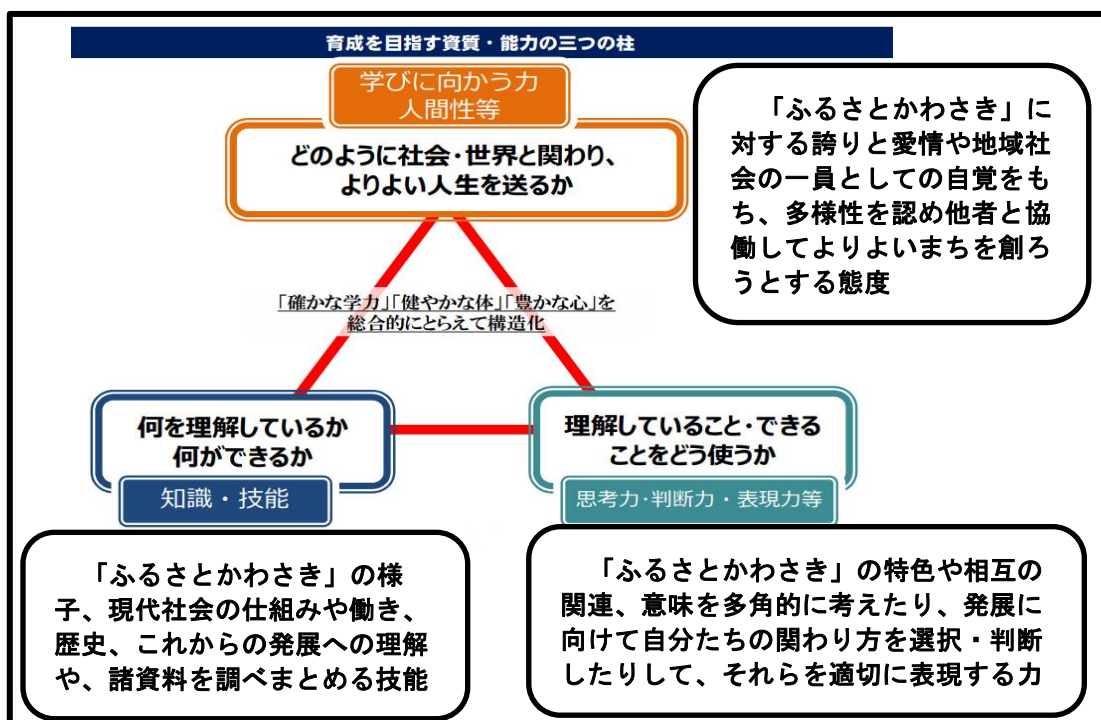


図4 副読本で育成を目指す資質・能力（平成28年中央教育審議会答申補足資料を基に筆者加筆）

副読本を学習で用いることは、社会的事象への理解だけでなく、自分たちの身近な地域である川崎市に対する郷土愛を育むこともできると考え「ふるさとかわさき」という言葉で川崎市を表した。副読本を使う小学校4年間を通して、これらの資質・能力が育成され、地域社会の一員としての自覚をもって主体的に問題解決しようとする態度や「ふるさとかわさき」への誇りや愛情を育んでいけるようにしたい。

(2) 主題・副題の設定

副読本で育成を目指す資質・能力を育むためには、問題解決的な学習過程を通して、社会的事象の見方・考え方を働かせながら、川崎市の姿や取組を理解したり、課題の解決に向けて自分の関わり方を選

⁶ 文部科学省『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説総則編』p.3

⁷ 文部科学省『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説社会編』p.17

⁸ 文部科学省『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説社会編』p.21

⁹ 学習指導要領において、小学校社会科では社会的な見方・考え方を「社会的事象の見方・考え方」としている。

択・判断したりすることで、よりよい社会の在り方を考え主体的に問題解決しようとする態度や、川崎市に対する誇りや愛情、川崎市の一員としての自覚などをもてる副読本を作成していくようにする。そのためには、問題解決的な学習過程に対応した内容を充実させることは欠かせない。そうすることで、学習で用いることができるページが増え、教師が授業で活用する機会も今より多くなるのではないだろうか。

次期副読本は、現行のよさを受け継ぎながらも、主体的・対話的で深い学びを通して、児童に育むべき資質・能力が育成できる新しい時代に合わせたものにしていかなければならない。中央教育審議会答申『令和の日本型学校教育』の構築を目指して¹⁰では、「令和の日本型学校教育」¹¹の姿として、「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」が示された。「個別最適な学び」の実現の手段として ICT の活用が、「協働的な学び」の実現のためには探究的な学習や体験活動を通して多様な他者と協働しながら学ぶ場を設定することが、今まで以上に重要とされている。副読本を通してこの学びの姿を考えると、「個別最適な学び」の実現のためには、児童一人一人が問題意識を持ち、必要に応じて ICT も活用しながら学習を進めることができる副読本にしていくことが大切となる。「協働的な学び」の実現のためには、他者と協働して学んだり、考えを交流したりすることのできる副読本であることも肝要である。どちらも、学習者である児童の視点に立った編集を進め、児童が活用しやすい副読本にしていくことで、実現できると考えた。そこで、主題・副題を以下のように設定した。

**児童が主体的に活用し、よりよい社会の在り方を考えることができる
副読本「かわさき」の作成・活用に関する研究**
—問題解決的な学習に、より一層対応した副読本「かわさき」をめざして—

II 研究の内容

1 次期副読本の編集方針

(1) 児童が副読本を主体的に活用している姿

児童が副読本をどのように使っていると、主体的に活用しているといえるのだろうか。澤井(2017)¹²は「主体的な学び」をしている具体的な姿として、「児童が①興味や関心をもっていること②見通しをもっていること③粘り強く取り組んでいること④自分の学びの振り返りができること」としている。副読本を主体的に活用しているということは、主体的に学びに取り組んでいることであると本研究では捉え、澤井の考えを援用した。そして学習過程の場面ごとに児童が副読本を主体的に活用している姿(表1)を設定した。

表1 児童が副読本を主体的に活用している姿

	学習過程	児童の姿
ア	課題把握	学習の見通しをもっている。
イ	課題追究	問題解決に必要な資料を見つけている。
ウ	課題追究	副読本をきっかけに、さらに別の資料を探している。
エ	課題追究	資料等を関連付けて考えている。
オ	課題解決	学習を振り返り、新たな課題を見つけようとしている。
カ	課題解決	学んだことをもとに、よりよい社会の在り方を考えている。

¹⁰ 中央教育審議会 答申「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～ 令和3年1月26日 p.15 3.2020年代を通じて実現すべき「令和の日本型学校教育」の姿

¹¹ 中央教育審議会 答申「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～ 令和3年1月26日 pp.16-19 (1) 子供の学び

¹² 澤井陽介「授業の見方『主体的・対話的で深い学び』の授業改善」東洋館出版 2017年 p.18

(2) 編集にあたって

現行副読本の分析や児童が副読本を主体的に活用している姿(p. 10 表1)をもとに編集方針を決めた。児童が学習の見通しをもったり、問題解決に必要な資料を見つけたりすることができるためには、まずは児童の発達の段階に即した適切な内容でなければならない。そこで、章立てを学年ごととし、学習指導要領に基づいた事例を取り上げ、対象学年の児童の発達の段階に合わせた紙面構成にしていくことにした。なお、学習指導要領の内容では扱われていないが、発展的な内容や他教科等の学習で取り上げることができる事例も考えられる。それらは章立てを新たにしたり、資料として掲載したりできるようにした。資料を活用する場面では、掲載資料だけでなく、ICT を活用して学びが深まるような紙面構成を考えていく。また、社会科での学習対象の範囲は、第3学年で主として市を、第4学年では主として県を、第5学年以降では国を取り上げるようになっている。そのため、第4学年以降の内容は、川崎市をきっかけに学ぶ対象を広げたり、学習したことをもとに川崎市を捉えなおしたりできるような構成にし、学習が副読本だけで完結しないように編集を進めていく。川崎市をきっかけに日本や世界にも目を向け、よりよい社会の在り方を考える素地を養えるような副読本にしていく。

これらの編集方針をもとに学習指導要領で示されている内容と照らし合わせながら取り上げる内容を整理し、全体構成を決定した(表2)。

表2 副読本の全体構成(現行版との比較含む)

現行版【192ページ】		全面改訂版【190ページ】	
第1章	私たちの住むまち 川崎市(第3学年) 1 空から見てみよう 2 川崎市のすがた	第1章	わたしたちのまち かわさき(第3学年) 1 川崎市について知ろう 2 川崎市のうつりかわり 3 川崎市ではたらく人たち
第2章	7つの区をたんけんしよう(第3学年) 1 川崎区たんけん 2 幸区たんけん 3 中原区たんけん 4 高津区たんけん 5 宮前区たんけん 6 多摩区たんけん 7 麻生区たんけん	第2章	受けつがれるまち かわさき(第4学年) 1 自然災害から人々を守る 2 地域で受けつがれてきたもの 3 小泉次大夫 用水を開く
第3章	川崎市の産業(第5学年) 1 川崎市で働く人たち 2 川崎市の工業 3 川崎市の農業 4 川崎市の商業	第3章	発展を続けるまち かわさき(第5学年) 1 川崎市の工業生産 2 情報を生かして発展する産業 3 環境とわたしたちのくらし
第4章	情報と私たちのくらし(第5学年) 1 災害情報ネットワーク 2 図書館ネットワーク	第4章	願いをかなえるまち かわさき(第6学年) 1 市民の願いと政治のはたらき
第5章	歴史のなぞを探ろう(第4・6学年) 川崎歴史新聞	第5章	わたしたちがつくるまち かわさき(全学年) 1 平和 2 環境 3 共生 4 未来
第6章	川崎市のうつり変わり(第3学年) 1 土地の使われ方の変化 2 人口の変化 3 うつり変わるくらしの様子 4 人びとが受けついできた行事や伝統文化	資料	7つの区をたんけんしてみよう
第7章	小泉次大夫 用水を開く(第4学年)	資料	川崎歴史新聞
第8章	未来に向かって(第5・6学年) 1 環境に優しい社会をめざして 2 平和な社会をめざして 3 とともに生きる社会をめざして		

第3学年「1川崎市について知ろう」では、これまでの「7つの区をたんけんしよう」を資料とし、市全体の姿を捉えられるページを新たに設けることとした。これにより、川崎市を身近な地域として捉えやすくなると考えたからである。また、学習指導要領で示されている「地域に見られる生産の仕事」は、地域にある農家や工場など取り上げる事例が地域の実態で変わってくる。しかし、事例がなく扱いに苦慮している学校が複数あるのが現状である。教科書で扱われているのは他市の事例であり、そのま

ま学習で扱うのは難しい。そこで、第3学年を対象とした川崎市内に見られる生産（農家・工場）のページ（「3川崎市ではたらく人たち」）を新たに作成し、地域の事例に課題がある学校でも、副読本を使って学習が行えるようにした。

第4学年「1自然災害から人々を守る」では、過去に市内で起こった災害を取り上げることで、より災害を身近な問題として捉え、自分たちにできる備えについて選択・判断できるようにしたい。現行の学習指導要領より新たに加わった「2地域で受けつがれてきたもの」は、今まで第3学年を対象としていた「川崎市の伝統芸能」の内容を見直し、新たに、市内で古くから行われている祭り（県指定民俗文化財）を事例として取り上げることにした。

第5学年「1川崎市の工業生産」では、川崎市の工業を鉄鋼・石油・最先端技術の開発で捉えた。京浜工業地帯の中心に位置する川崎臨海部を取り上げることで、川崎の工業だけでなく我が国の工業の理解にもつながるようにした。「2情報を生かして発展する産業」では、市内の情報を生かして発展する産業の事例を複数取り上げ、教科書と併用して学習を進められるようにした。

第6学年「1市民の願いと政治のはたらき」では、現行に掲載されている子育て支援センターだけでなく、等々力球場改修の事例等も取り上げ、政治が身近な暮らしと関わっていることを実感できるようにした。

「第5章わたしたちがつくるまち かわさき」では、SDGs¹³の視点を取り入れた内容構成を考えた。本市はSDGs 未来都市¹⁴として、持続可能な社会の実現をめざしている。これからの社会を担う児童にSDGsの視点で社会的事象を捉え、行動していくことは欠かせない力となってくる。川崎市の過去・現在の姿を通して、広い視野で川崎市の姿を捉え、世界の人々とのつながりや共生社会の実現といった、未来の川崎市について考えることができるようにした。

2 ページ試案の作成

(1) 問題解決的な学習過程の場面に合わせたページ構成

ここでは問題解決的な学習過程を、課題把握する場面、課題追究する場面、課題解決する場面の三つで捉えてページ構成に反映させていく。これは現行副読本でも用いられている構成である。小林(2011)は、それまでの副読本の課題として「子どもたちの中に生まれようとする問題意識が、同じページを見ることによって、十分な思考を伴わずに解決してしまう」という点を指摘している。この課題を解消するために、現行副読本では、三つの場면을それぞれ別のページに表した構成にしている¹⁵ (図5)。実際

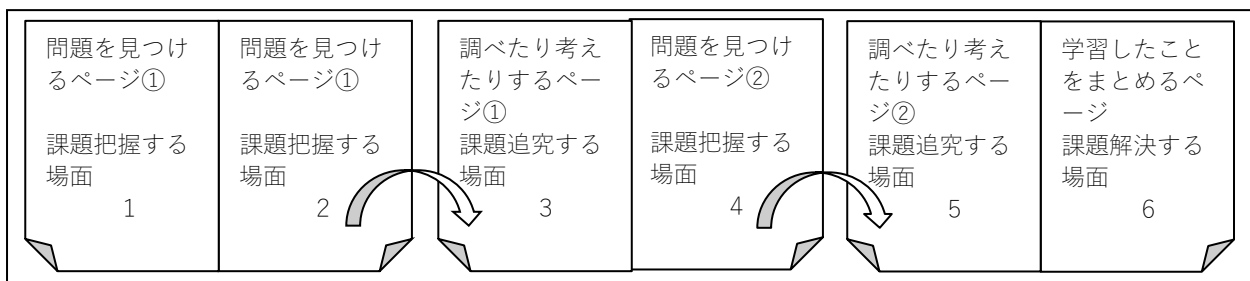


図5 「問題解決的なページ」の構成 小林(2011)作成に筆者が加筆

¹³ 「Sustainable Development Goals:持続可能な開発目標」の略。平成27(2015)年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」にて記載された2016年から2030年までの国際目標のこと。

¹⁴ 本市は、平成31(2019)年2月にSDGs推進に関する基本的な方針として「川崎市持続可能な開発目標(SDGs)推進方針」を策定。令和元年度「SDGs未来都市」に国から選定された。

¹⁵ 小林正史他「副読本「かわさき」の作成と活用に関する研究」

にこの構成となっている「第7章 小泉次大夫 用水を開く」は、第4学年の先人の働きの学習で活用されている。アンケート¹⁶の自由記述でも「学習の流れになっていてとても使いやすい」「見学に行けなくても意欲的に学習に取り組める」といった肯定的な意見があがっていた。児童が主体的に問題意識をもち、意欲を持続させながら学習を進められる構成であるといえる。そこで次期副読本でもこの構成を取り入れていき、児童が主体的に活用できるための手立ての一つとしていくこととした。

(2) キャラクターによる吹き出しの活用

現行副読本だけでなく、現在使用されている教科書や地図帳、資料集などを見ても、キャラクターによる吹き出しが児童の学びを支援していることが分かる。短い言葉でわかりやすく学習の流れやヒントが示されていることは、児童が学習の見通しをもったり、自ら調べたりするためには大切なことである。そこで、児童が主体的に学習に取り組んだり、活用したりするために、吹き出しを効果的に活用し、編集に反映させていくこととした(図6)。

副読本に登場するキャラクターを児童と教師とし、それぞれの役割を決めた。児童のキャラクターが話すことは「問題意識をもてる問いかけ」「社会への関わり方を選択・判断する問いかけ」「発展的な学びにつながる問いかけ」などとした。教師のキャラクターが話すことは「社会的現象の見方・考え方を働かせて資料を読み取れるような問いかけ」「学習の道筋を促す問いかけ」などとした。資料の補足説明や用語などを解説する際は吹き出しではなく、別枠で扱うようにした。吹き出しの役割を明確にすることで、児童が吹き出しを手がかりとして学習に取り組めると考えたからである。

(3) ICT 活用と関連させた紙面構成

令和元年12月に、文部科学省より「GIGA スクール構想」が打ち出され、本市では令和3年度より「かわさき GIGA スクール構想」のもと1人1台端末及び高速大容量の通信ネットワークを活用した学びが行われている。副読本が発刊される2023(令和5)年度は「かわさき GIGA スクール構想」のステップ3にあたる¹⁷。児童には、各教科等の学びをつないだり、探究したりして課題を解決する力、ICTを活用して様々な人とつながり、社会課題を解決して自分自身について考える力が求められる。副読本にも、ステップ2までで育成された資質・能力を伸長させ、児童の情報活用能力を十分に発揮できるような編集が求められるのは必須である。そこで、副読本とICTをどのように関連させていくと児童にとって活用しやすいものになるのか検討を行った。

紙面だけでは掲載できる資料に限りがあるが、副読本掲載資料とデジタル資料を併用することでより



図6 キャラクターの役割に応じた吹き出しを活用したページ試案

¹⁶ 脚注7のアンケート

¹⁷ 川崎市教育委員会『かわさき GIGA スクール構想 教職員向けハンドブック はじめよう かわさき GIGA スクール構想～ステップ0・1～』p.6

多くの資料を見童が手にする可能性が広がり、学びが深まることが考えられる。そこで、発展的な資料や補足資料等にはQRコードを掲載したり、キャラクターが調べる視点を投げかけたりして、ICTを活用して調べられる紙面構成にしていくこととした。また、児童の理解の手助けとなるように、働く人へのインタビューや伝統芸能の様子などを可能な限り動画資料として作成し、副読本からアクセスできるようにもしていく。このように、副読本とICTを関連させて資料活用できる場面を学習のねらいに沿って検討し、見童が活用しやすい紙面の作成を進めた(図7)。

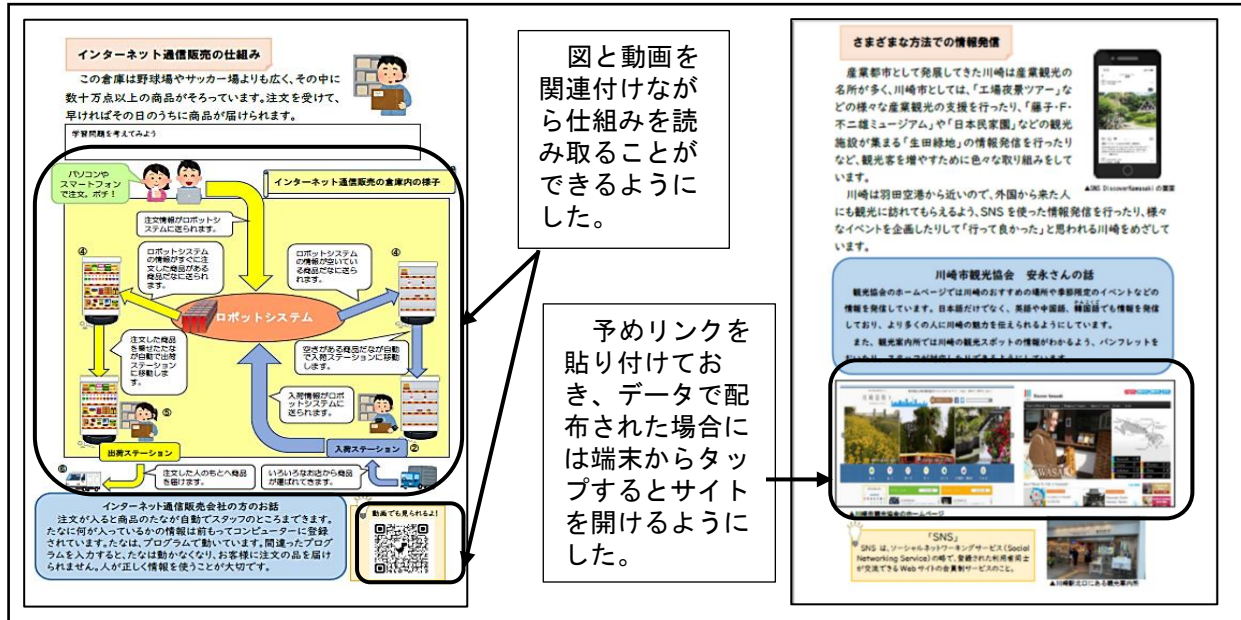


図7 ICTの活用と関連させたページ試案

(4) よりよい社会の在り方について考えることができる場面の設定

見童が「よりよい社会の在り方を考えることができる」副読本にするためには、「多角的に考えたり、社会への関わり方を選択・判断したりする」場面の設定が欠かせない。「社会への関わり方を選択・判断する」場面は、学習指導要領の「内容の取扱い」に「多角的に考える」「選択・判断」等が示された内容のページで取り上げるようにした(図8)。

この場面ではキャラクターが、見童が考える際のヒントになるような問いかけをするようにしていく。例えば、「自分たちにできることは何か」「これからの川崎市はどうなっていくといいかな」などである。そして、学習指導要領では考えたことを表現する活動として、第3・4学年では、文章で記述したり図表などに表したりしたことを使って説明すること、第5・6学年では、根拠や理由などを明確にして論理的に説明したり、他者の主張につなげ立場や根拠を明確にして議論したりすることが示されている。これら全ての活動場面を副読本で取り上げるのは難しい。そこで、教科書に掲載されている活動例と併用していけるよう紙面構成を考え、見童の発達の段階や学習状況に合わせた活動ができるようにしていく。

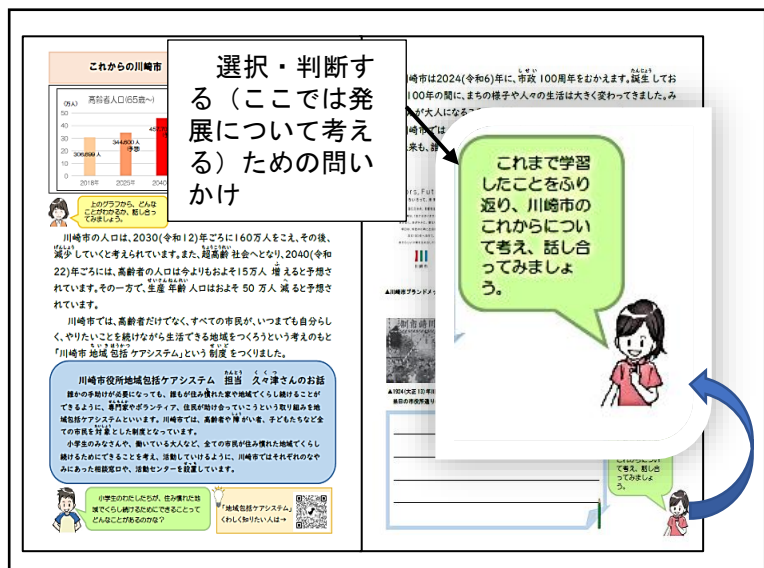


図8 市の発展について考えるページ試案

3 ページ試案に基づいた検証授業の実施

(1) 検証授業の視点

編集方針で設定した児童が副読本を主体的に活用している姿 (p.10 表1) を、ページのねらいに沿って具体的に示し、それを視点に検証を進めるようにした。また、掲載資料が適切か、教師の資料提示や発問の仕方はどのような方法が考えられるかについても検証を行い、ページ試案を再構成する際や指導資料作成に生かせるようにした。単元計画の作成にあたっては、小学校社会科教育研究会作成の指導計画例(令和2年度4月版)を参考にした。

(2) 検証授業

①川崎市立A小学校 第5学年

ア 単元名

「情報を生かして発展する産業—川崎市の観光業—」

イ 単元の流れ

・7時間扱い、○は時数、下線はページ試案を活用した時間

1. 情報通信技術を利用することでくらしや産業はどのように変わってきているのだろうか。①
2. お店では、どのように情報通信技術を使っているのだろうか。②
3. 商品を売る人たちは、大量に集まった情報をどのように生かそうとしているのだろうか。③
4. 川崎に観光に来てもらうために、情報通信技術をどのように生かしているのだろうか。④
5. 観光案内所では、川崎に観光に来た人たちのために、どのような取組をしているのだろうか。⑤
6. 情報通信技術を利用することでくらしや産業はどのように変わってきているのだろうか。⑥⑦

ウ 用いたページ試案のねらいと授業の実際

【問題を見つけるページ】

川崎市の観光—情報を生かして発展する産業

産業観光がさかんなまち

① 川崎市を訪れる観光客数の移り変わり

年	観光客数(人)
2007年	1,326,126
2008年	1,326,126
2009年	1,414,247
2010年	1,509,103
2011年	1,548,256
2012年	1,548,256
2013年	1,548,256
2014年	1,548,256
2015年	1,548,256
2016年	1,548,256
2017年	1,600,000

② 川崎市を訪れる観光客数は、どのように変化しているのでしょうか。

川崎市にはいろいろな観光施設があるんだね。みんなが行ったことがある場所はどこがあるかな？

③ 産業都市として発展してきた川崎市は産業観光がさかんなまちです。また、市内には産業観光だけでなく多くの観光名所があります。そして、新しい観光施設も、年々増えてきています。川崎市では、観光業をさかんにするためのさまざまな取り組みを行っています。平成23(2011)年に川崎市観光協会、令和2(2020)年に川崎駅北口に観光案内所ができました。川崎市や観光協会では、川崎のみをよくを伝え、多くの人に訪れてもらうために、情報通信技術を活用した取り組みを行っています。

情報通信技術などのように活用しているのかな？

「産業観光」歴史的・文化的に価値ある工場や機械などの産業文化財や産業製品を通じて、ものづくりの心にもとれることを目的とした観光。

このページのねらいは「川崎市では、産業観光がさかんであり、観光客が年々増加していることから、観光協会や川崎市が情報通信技術をどのように活用しているのか問題意識をもてるようにする」ことである。①「川崎市を訪れる観光客数の移り変わり」資料と②の教師キャラクターの吹き出しを関連付けて考え、問題意識をもてるようにした。③の本文では、川崎市の観光の特徴や取組について表記し、児童の思考の手助けとなるようにした。

実際の授業では、川崎市の観光地の写真があることで具体的なイメージをもって学習に臨むことができていた。そして、SNSを使った情報発信といった学習のねらいに迫る発言も多く見られた。川崎市が力を入れている産業観光は、児童にとってあまりなじみのある言葉ではなかったが、枠外の言葉の説明や写真資料があることで具体的なイメージをもって学習問題を作ったり、自分の考えをもった

りすることができていた。また、前時までに学習した小売店における ICT 活用の既習を生かすことで、観光業と ICT の関連について児童が見通しをもちながら進めることができていた。

【調べたり考えたりするページ】

さまざまな方法での情報発信

① **川崎市観光協会のホームページ**

観光協会では多くの人に川崎に訪れてもらえるよう、工場見学や工場見学などの観光ツアーを企画することや、旅行会社と協力で川崎の魅力を日本各地に伝える活動をしています。

ホームページでは川崎市のおすすめの場所や季節限定のイベントなどの情報を発信しています。日本語だけでなく、英語や中国語、韓国語でも情報を発信し、国内外の多くの人に川崎の魅力を伝えるようにしています。

また、観光案内所では川崎の観光スポットの情報がわかるよう、パンフレットを配ったり、スタッフが対応したりできるようにしています。

川崎市の観光や魅力はどんなところなのか、この2つを比べてみると...

▲川崎市観光協会のホームページ

多くの人が安心して訪れることができるように

③ **観光案内所 田中さんの話**

の観光案内所では、日本語だけでなく、英語や中国語を駆使するスタッフがお客様を歓迎しています。それ以外の言語のご案内は、ほんやくタブレットを使用しています。お困りから訪れても、安心して川崎を観光してほしいです。

また、市内に住む多くの方も観光案内所を訪れます。川崎の観光の魅力をたくさんの方に知ってもらっています。

▲川崎駅西口にある観光案内所

④ **川崎市役所観光プロモーション推進課 辻さんの話**

川崎市では、民間企業が集めているビッグデータをもちに、この圏から訪れる人が多いのか、どんなお土産を買っているのかなどを分析し、より多くの人が訪れたいと思えるための新しい取り組みについて考え、SNSで発信しています。

川崎は別荘地から近いので、外県から来た人にも観光に訪れてもらえるよう、SNSを使った情報発信や様々なイベントを企画して、「行って良かった」と思われる川崎をめざしています。

▲SNS (@kawasakifans)

川崎市では、登録すれば誰でも無料で使える「かわさきWi-Fi」の整備を進めています。

⑤ **かわさきWi-Fi**

SNSはインターネットのネットワークサービス(Social Networking Service)のことで、登録された利用者同士が交流できるWebサイトの運営サービスのことです。

⑥ **これからの川崎市の観光**

川崎市を訪れる観光客数の推移

年	観光客数(人)
平成25年	1467
平成26年	1500
平成27年	1276

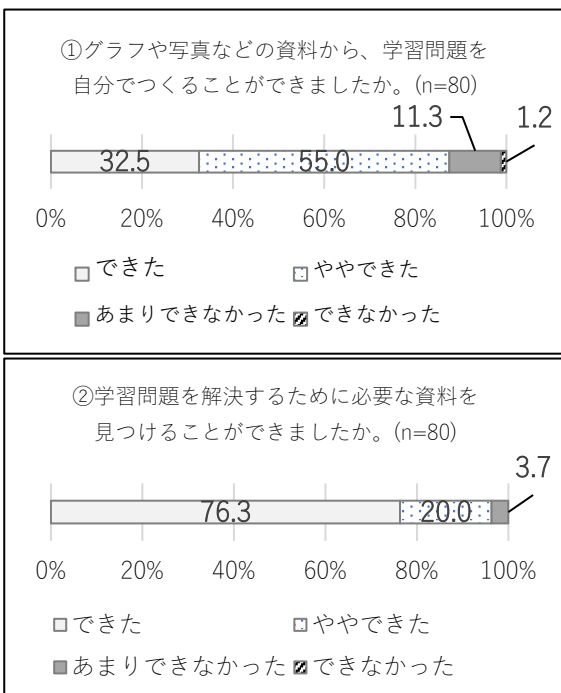
▲川崎市の観光客数(単位:人)

左ページのねらいは「観光協会では、川崎市の観光に関する情報を、インターネットなどを通じて発信していることを理解し、それらが多言語に対応していることから世界の人々にも情報を発信していることに気付けるようにする」ことである。①「川崎市観光協会のホームページ」資料と②「観光協会の方の話」から、観光客に訪れてもらうための取組について考えられるようにした。実際の授業では、観光協会のホームページに

アクセスしてどんな情報を発信しているのかを調べたり、多言語に対応した機能を試したりしながら、実際に行っている取組について実感を伴いながら理解する姿が見られた。

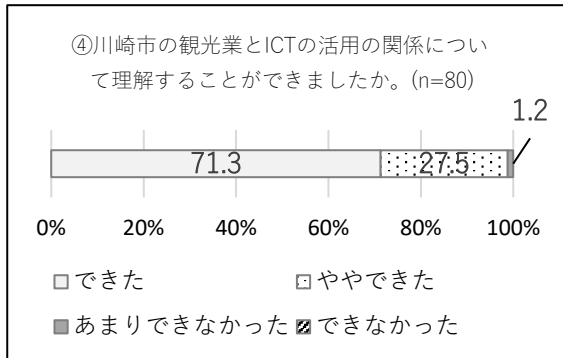
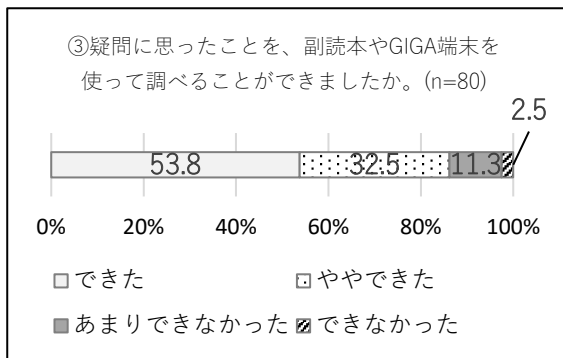
右ページのねらいは「観光協会では多言語に対応するために、タブレットを使って対応していること、川崎市では「かわさき Wi-Fi」の整備を進めるなどし、訪れた観光客の人が安心して観光できるサービスを行っていることを知り、情報化の進展がくらしの向上につながっていることに気付けるようにする」ことである。③「観光案内所の方の話」から観光案内所で実際に行っているサービスを、④「川崎市役所の方の話」と⑤「かわさき Wi-Fi」の資料から川崎市が ICT を活用して観光業をさかんにしようとしていることを考えられるようにした。⑥「川崎市を訪れる観光客数の移り変わり」では、これからの川崎市の観光業について多角的に考えるための補助資料になるように、掲載をした。実際の授業では、前ページの資料と関連させながら③の資料から多言語対応について考えていた。④⑤の資料は、川崎市が訪れた人が安心できるようにしているサービスについて考えるきっかけとなっていた。学習のまとめでは⑥の資料を使い、これからの川崎の観光業について自分の考えをまとめた。

エ 授業後の児童向けアンケート分析



①で「あまりできなかった」「できなかった」と回答した児童のうち、他の項目でも同様の回答をしている児童は4人いた(2人は②、2人は③の質問で回答)。児童が問題意識をもてるようにするためには、本文の内容や資料提示の順番などを再検討する必要があると考えた。

②で「あまりできなかった」と回答した児童は3人いた(うち2人は①も同様に回答)。「あまりできなかった」と回答した児童の自由記述は「川崎市はこんなことをやっているんだと思って、もっと知りたくなった」「ICTを活用してのサービスは他にもできるものがあるのではないかと考えた」「ICTは全世代に使えるようにしたらもっとよくなる」であった。学習内容の理解はできていたり、新たな問題を見いだそうとしたりすることはできていたと考えた。



③で「あまりできなかった」「できなかった」と回答した児童は 11 人いた（うち 2 人は①、1 人は④も同様に回答）。「あまりできなかった」と回答した児童の自由記述では「もっとグラフや表などがあつたら分かりやすかった」「資料を増やしてみたら問題に関係することがたくさん見つかると思う」といった編集に関する意見が出ていた。これらの意見を参考にしてページ試案を見直すことで、より児童が活用しやすい副読本になると考えられる。

④で「あまりできなかった」と回答した児童は 1 人いた（③も同様に回答）。この児童の自由記述では「川崎市に問わずいろんな場所で様々なサービス（外国人向けのホームページなど）を多くの人が使えるようにしていた。さらに翻訳機能なども付けていたので誰でも使えるようにしていることがわかった」とあつた。

自由記述では、「川崎市の観光と ICT の活用について学習をして私は観光業をもっと人気にさせるには、人と ICT の活用バランスを上手く使えばより人気になるのではないかと考えました」「川崎市は他の地域とは違って産業観光に力を入れていることもわかった。なので私は、工業地帯の川崎市にすることが特別だと思い、川崎市の魅力を家族などに伝えて広めたいです」といったこれからの社会の在り方について考えている意見が見られた。

オ 考察

「川崎市の観光」は現行副読本では扱われていない全く新しい内容である。近年川崎市が力を入れている産業観光と ICT の活用を関連付けた資料や、観光業に携わる人の話を多数掲載した。授業の中で「川崎市も観光に力を入れているんだ」「もっと川崎の観光について知りたい」という発言が児童からは出していた。ここから川崎市を新たな視点で捉えることはできていたと考える。また、アンケートの結果から、川崎市の観光業と ICT の活用の関係についてもおおむね理解できていたことが分かった。課題は、1 時間ごとに学習問題を設定したことである。一つの学習問題を 2 時間通して解決する構想にすることで、より児童の問題意識に沿った学習展開になった。これは指導資料作成の際の単元構想で生かしていくようにする。また、ページのねらいと児童の思考がずれていたため、あまり活用されないままの資料があつた。そのため、ページを再構成する際にねらいと資料の整合性について再度検討した。

②川崎市立 B 小学校 第 5 学年

ア 単元名

「情報を生かして発展する産業—販売業—」

イ 単元の流れ

・ 7 時間扱い、○は時数、下線はページ試案を活用した時間

1. 情報通信技術を利用することでくらしや産業はどのように変わってきているのだろうか。①
2. なぜ同じホームページなのに、それぞれ違ったおすすが紹介されるのだろうか。②
3. なぜ、ネット通販会社はこんなに早く商品を届けられるのだろうか。③
4. わたしたちのもとへどのようにして、早く荷物を届けているのだろうか。④
5. 観光に携わる人々は、情報をどのように生かしているのだろうか。⑤
6. 情報通信技術を利用することでくらしや産業はどのように変わってきているのだろうか。⑥⑦

ウ 用いたページ試案のねらいと授業の実際

【問題を見つけたり調べたりするページ I】

① このページのねらいは「ネット通販会社では、消費者の情報（閲覧履歴・購入履歴）を集め、レコメンド機能を利用しておすすめ商品や補充商品を知らせ、売り上げを高めることに取り組んでいることに気付けるようにする」ことである。①の資料では、同じ会社のホームページでも、人によって表示されるおすすめ商品が異なることから問題意識をもったり、ネット通販会社が情報を活用したりしていることを読み取ることができるようにした。②の本文は、①の資料を読み取る際の補足資料となっている。

このページのねらいは「ネット通販会社では、消費者の情報（閲覧履歴・購入履歴）を集め、レコメンド機能を利用しておすすめ商品や補充商品を知らせ、売り上げを高めることに取り組んでいることに気付けるようにする」ことである。①の資料では、同じ会社のホームページでも、人によって表示されるおすすめ商品が異なることから問題意識をもったり、ネット通販会社が情報を活用したりしていることを読み取ることができるようにした。②の本文は、①の資料を読み取る際の補足資料となっている。

実際の授業では、導入で①の下部分「情報を活用する」の資料だけを提示し、学習問題「なぜホームページの商品が人によって変わるのだろうか」を作った。予想する場面では、「コンピュータが今まで集めたデータをもとにその人に合ったものをおすすめしている」「その会社の中でよく売れているものをおすすめしている」といった考えが出ていた。調べる場面では、それぞれの購入履歴から、消耗品は次も同じ商品を、嗜好品は関連した商品をおすすめしているという事実を読み取り、図と本文を関連付けて問題の解決を図る姿が見られた。ネット通販を利用している家庭が多かったことから、「家の人は…」や「自分の家では…」といった、身近な問題として捉えている発言が多く出ていた。

【問題を見つけたり調べたりするページ II】

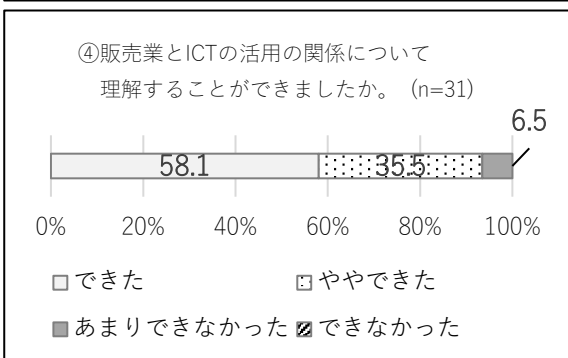
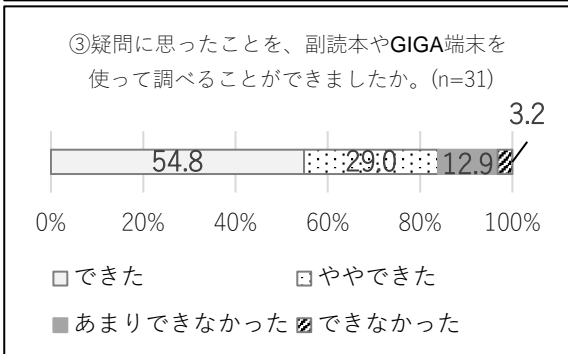
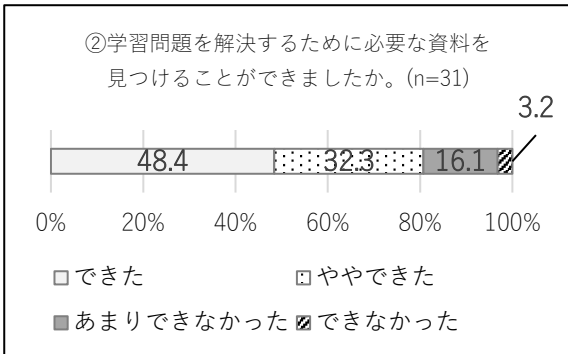
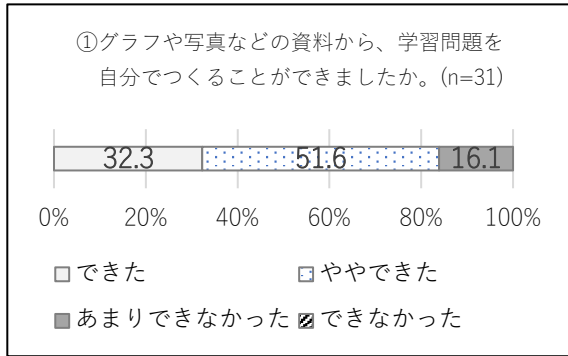
③ このページのねらいは「ネット通販会社では、注文を受けてからすぐに商品を出荷できるようにするために、ロボットを活用したり、人が情報を正しく使ったりしていることに気付けるようにする」ことである。①では、地図でネット通販会社の倉庫が川崎市内にあることを確認できるようにした。また、倉庫内で行われている大まかな仕事内容についてのイメージをもてるように写真資料を掲載した。②のネット通販会社の人の話では、倉庫内では人だけでなくロボットも働いていることを説明し、ICTとの関連をより意識して学習問題を作れるようにした。③の本文では、倉庫の広さや扱っている商品数から学習問題を作れるようにした。そして④のイラストから倉庫内の仕組みを読み取り、⑤のネット通販会社の人の話と関連付けて学習問題を解決できるようにしている。また、⑥のリンクから倉庫内の様子を動画で確認できるようにした。

このページのねらいは「ネット通販会社では、注文を受けてからすぐに商品を出荷できるようにするために、ロボットを活用したり、人が情報を正しく使ったりしていることに気付けるようにする」ことである。①では、地図でネット通販会社の倉庫が川崎市内にあることを確認できるようにした。また、倉庫内で行われている大まかな仕事内容についてのイメージをもてるように写真資料を掲載した。②のネット通販会社の人の話では、倉庫内では人だけでなくロボットも働いていることを説明し、ICT

との関連をより意識して学習問題を作れるようにした。③の本文では、倉庫の広さや扱っている商品数から学習問題を作れるようにした。そして④のイラストから倉庫内の仕組みを読み取り、⑤のネット通販会社の人の話と関連付けて学習問題を解決できるようにしている。また、⑥のリンクから倉庫内の様子を動画で確認できるようにした。

実際の授業では、ICT を用いて、ネット通販会社の場所や航空写真で広さなどを確認する場面が見られた。また、学校からどのくらい離れているのを調べ、身近な場所にあることを実感しながら問題意識をもつ姿がみられた。掲載されている資料だけでなく、実際の注文画面を提示することで、早い時では注文したその日に商品が届くという事実を児童に具体的に捉えさせ、「なぜたくさんの方が注文するのに、早ければその日のうちに商品が届くのだろうか」という学習問題を作る手がかりとした。資料を読み取る場面では、多くの児童が⑥を使い、動画で倉庫内の様子を調べていた。ページ試案と動画の画面を並べ、関連付けながら読み取ろうとしている児童の姿も見られた。

エ 授業後の児童向けアンケート分析



①で「あまりできなかった」と回答した児童は5人いた(うち2人は②、1人は③も同様に回答)。学習問題を自分で作ることで、その時間の追究意欲は高まっていくと考える。児童が問題意識をもちやすい資料提示や紙面構成を再検討していく必要がある。

②で「あまりできなかった」「できなかった」と回答した児童は6人いた(うち1人は①、1人は④も同様に回答)。学習問題を解決するために必要な資料がわからないと、その後の話し合いにも参加するのが難しくなり、学習内容を十分に理解するところまで至らないことも考えられる。児童が学習の見通しをもてるよう、吹き出し等を活用し、学びを支援していけるように紙面を工夫する必要があると考える。

③で「あまりできなかった」「できなかった」と回答した児童は5人いた(うち1人は①、1人は④も同様に回答)。児童が疑問を解決するための手段として、副読本がまず基本となるよう、資料の見直しを行い、より児童の思考に合わせたものにしていけるようにする。

④で「あまりできなかった」と回答した児童は2人いた(うち1人は②、1人は③も同様に回答)。自由記述には、「ICTが主に荷物を整理して、運ぶのは人がやっている」と記述していた。この記述からは、人がICTを活用しているというねらいまで理解することが難しかったことが分かる。抽象的な内容を児童が自ら追究しながら実感を伴った理解へとつなげるための資料を掲載する必要がある。

自由記述では、「たくさんICTを活用して、より早く荷物を運ぶ工夫をしている」「販売業では、素早く運べるように荷物を運びやすくしていたり、積み方を工夫していたり」「宅配するのにロボットを活用して早く届く工夫をしている」といった、販売業と運輸業を関連して

捉えている内容が見られた。

オ 考察

ページ試案だけで児童が実感を伴いながら学習を進めることが難しい場面では、端末を活用して資料を提示したり、調べたりする活動を行った。ネット通販会社の倉庫内でICTをどう活用しているのか調べる場面では、動画と資料を関連付けながら読み取る姿が多く見られた。動画資料を児童が自分のタイミングで判断しながら活用していく、次期副読本の編集方針が学習で効果的であることが示された場面であった。

「問題を見つけたり調べたりするページⅡ」を用いた授業では、児童の問題意識は倉庫内のことだけでなく運輸面にも向いていたため、1時間で資料の読み取りや話し合いを深めるのが難しかった。アンケートの自由記述にもあったが、販売業と運輸業は密接に関わっているため、児童が関連付けながら問題を追究していくのは当然の流れだと考える。今回のページ試案では運輸業との関連に迫れる資料を掲載はしなかったが、児童の思考の流れを考えると掲載資料を再考する必要がある。

③川崎市立C小学校 第3学年

ア 単元名

「川崎市の様子の変り変わり」

イ 単元の流れ

・10時間扱い、○は時数、下線はページ試案を活用した時間

1. 私たちの住む川崎市は、どのように変わってきたのだろうか。①
2. 川崎市の土地利用の様子は、どのように変わってきたのだろうか。②
3. 川崎市の学校は、どのように変わってきたのだろうか。③
4. 川崎市の鉄道や道路はどのように変わってきたのだろうか。④
5. 川崎市の人口はどのように変わっていったのだろうか。⑤
6. 道具はどのように変わってきたのだろうか。⑥
7. 私たちの住む川崎市は、どのように変わってきたのだろうか。⑦
8. これからの川崎市はどうなっていくのだろうか。⑧⑨

ウ 用いたページ試案のねらいと授業の実際

【問題を見つけるページ】

2 川崎市のうつりかわり

昔と今の川崎市

① 川崎市は、1924(大正13)年7月1日に川崎町、御幸村、大崎町の合併により誕生しました。このころの川崎市は、多摩川の水を使って野菜作りや梨・桃のさいばい。海では魚苗の養殖などがさかんに行われていました。また、臨海部や多摩川沿いには大きな工場がたくさんならび、全国から働く人が集まってくる工場のまちでもありました。

②  

▲川崎駅周辺

③  

▲武蔵小杉駅周辺

昔と今で同じようなところがあるものをさがし、写真を見くらべてみよう。

今と昔では、まじりの様子がどう変わったのかな。

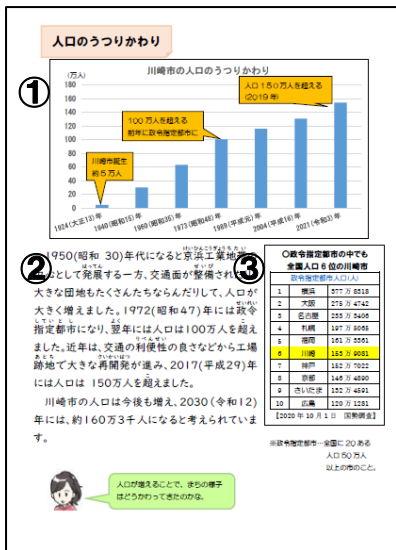
学習問題も考えてみよう。

このページのねらいは「昔と今の写真を比べ、市の様子の変り変わりに気づき、問題意識をもてるようにする」ことである。①では、市の様子の変り変わりに興味・関心をもてるよう、川崎市が誕生したころのまちの様子について記述をした。②の写真資料は、1939年と2021年の川崎駅と武蔵小杉駅周辺の航空写真である。児童が比較しやすいよう、同じアングルで掲載をした。③の児童キャラクターは写真を見る視点やどんな問題意識をもったらよいのかを投げかけている。

実際の授業では、自分たちの住む地域の移り変わりの様子をきっかけとして、視点を市域全体へと広げていくようにした。昔と今の写真を比較する場面では、ICTでも副読本のページを見ることができるようにした。児童は、写真を拡大したり、向きを変えたりしながらまちの様子について細かく読み取りをしていた。

単元を見通す学習問題を作る場面では、既習事項である、市の様子を捉える視点(地形、土地利用、交通、公共施設)を用いながら、気付いたことを整理していき、学習問題「川崎市の様子はどのように変わってきたのだろうか」を作った。学習計画を立てる場面でも、市の様子を捉える視点に沿って、土地利用や交通網、公共施設の移り変わりを調べたいと発言する姿が見られた。また、建物が増えていることから、人口の増減についても着目して学習の見通しをもっていた。

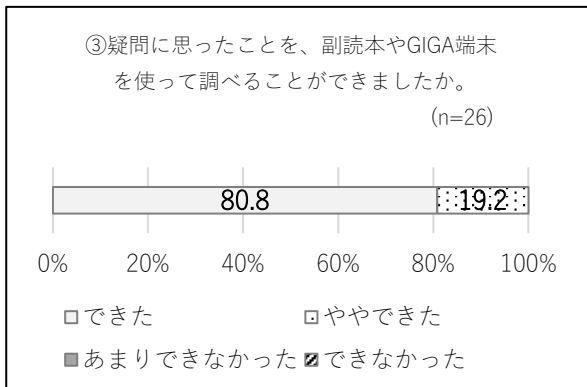
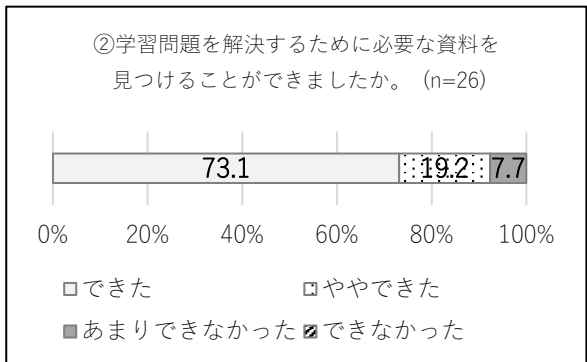
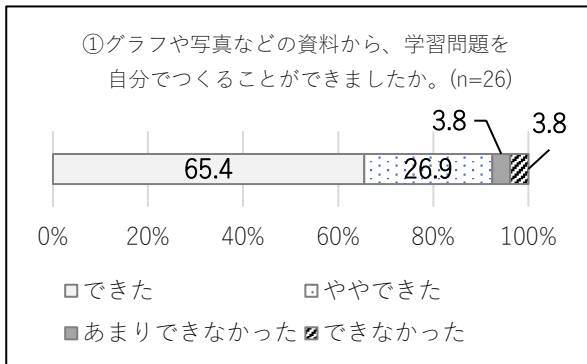
【調べたり考えたりするページ】



このページのねらいは「川崎市の人口は年々増加していること、それはまちの様子の移り変わりと関係していることを関連付けて考えられるようにする」ことである。①では、川崎市が誕生した1924年から2021年までの市の人口推移を棒グラフで表し、人口が増えていることを視覚的にも分かりやすく示した。取り上げた年代は、区が5つから7つに増えた年、人口が100万人を超えた年などにした。②では、まちの様子の変化を記述することで、人口が増えたこととまちの様子の変化を関連付けられるようにしている。③は、川崎市が日本の中でも人口の多い大都市であることがわかるよう、政令指定都市の人口を表で示している。

実際の授業では、前時で学習した土地利用の変化とも関連付けながら棒グラフの推移を読み取っていた。「住宅や商店が増えてきているのは、人口が増えていることと関係しているんだ」と、読み取ったことと既習をつなげて考えていた。また、年代ごとの増え方にも着目をしてその理由を考えている児童もいた。

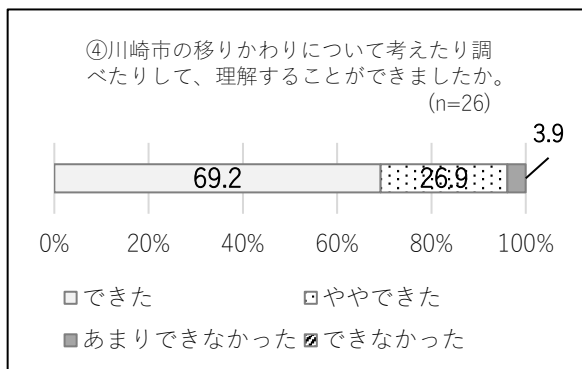
エ 授業後の児童向けアンケート分析



①であまりできなかった、できなかったと回答した児童は2人いた(うち1人は②④、1人は②も同様に回答)。児童の発達の段階を考慮し、吹き出しを増やすなどして問題意識をもてるための視点を丁寧に示すことも大切であると考え。これは②の結果にも同じことがいえる。それは、②であまりできなかったと回答した児童は①でも同様の回答をしているからである。学習を児童が進めていく上で、問題意識をもつことがいかにその後の学びに影響するのかが明らかになった結果であるといえる。

③では全ての児童ができた、ややできたと回答している。1時間目に既習を生かし、市の様子を捉える視点ごとに予想や学習計画を立てたことで、ページ試案のどこを見るとその問題が解決するのかが明確であったことが関係していると考え。また、ページ試案は、カラー印刷して冊子形式にしたものとデータ化したものを児童に配付した。グラフや文章に気付いたことを書き込みたいときには冊子形式のものを、写真を詳しく見たいときにはICTを使うなど、児童が自分の目的に合わせて活用する姿が多く見られた。

④であまりできなかったと回答した児童は1人である。この児童は③ではややできたと回答しているが、その他の項目ではあまりできなかったと回答している。



この学級では、調べる活動で相談タイムを取り入れていた。友達の学びをヒントに調べることができていたのではないだろうか。

自由記述には「昔や今の写真が入っていて比べやすかった」「川崎市の未来についても考えることができてよかった」といった学習のねらいに迫ることができていた意見が多く見られた。編集に関することでは「交通のページの赤とピンクが分かりにくかった」「臨海部の

の埋め立ての様子ที่分かりにくかった」といった意見が出ていた。

オ 考察

単元の流れに合わせてページ試案を作成したため、児童にとっては自分で調べたり、友達と学び合ったりすることができるものになっていたと考える。その一方で、自分だけで学習を進めていくのが難しい児童もいた。対象となる第3学年の発達の段階に合わせ、悩んだときのヒントになるよう、吹き出しには学び方や着目する視点を丁寧に示すことも、作成を進めていく上で大切にしていかなければならない。

Ⅲ 研究のまとめ

1 今回の研究で見えてきたこと

(1) 川崎市を教材化することの意味

次期副読本には、これからの川崎市の発展や産業の在り方について考えたり、自分がどう関わっていったりするのかを考えることができる場を複数設定した。検証授業での児童の発言や振り返りからは、学んだことをもとに、自分事として捉えたり、自分にできることを考えたりする姿が見られた。社会的事象の見方・考え方を働かせて川崎市に見られるさまざまな事象を捉え、市民としての自覚をもって社会参画をしていく素地を育めることがわかった。こうした活動を積み重ねていくことで、学ぶ対象が日本や世界と広がっても、同じようによりよい社会の在り方について考えることができる資質・能力が育まれていく。そのためにも、先人たちの功績や、現在も受け継がれている伝統芸能、変わりゆく産業など川崎市の姿を正確に捉え、児童の興味・関心、追究意欲が持続できるような副読本を引き続き作成していくようにする。

(2) ICTを活用した編集

市役所関係部局や団体、民間企業等が快く資料提供や取材等に協力して頂けたため、精度の高い資料を多数入手することができた。今までは紙面に限りがあり掲載が難しかったものも、ICTの活用を取り入れた紙面構成にすることで、児童が多くの資料を手にするのが可能になった。検証授業を通して、動画資料やホームページへのリンクを貼ることなどが児童の学びを深めるための手立てとして有効なことがわかった。引き続き資料活用という視点から、ICTと副読本を関連付けながら編集を進めていき、より児童一人一人の学びに寄り添える副読本を作成していくようにする。

(3) 児童アンケート分析をもとにしたページ試案の見直し

検証授業を通し、発達の段階に応じた資料を掲載することが、児童の興味・関心を高めることが改めてわかった。例えば、3年生では比較できる写真資料や吹き出しによる学びの支援、5年生では関連付けて考えることができる資料を掲載することなどである。本研究では、実際に授業で使う教師の視点で

編集を進めるだけでなく、児童アンケートの意見も分析しながらページ試案の修正を行うようにした。こうした学習者の視点からの修正を進めることで、より児童の思考に沿った紙面構成になり、多くの児童が主体的に活用できる副読本の作成につながっていくと考える。

2 今後の課題

(1) 児童や教師が活用できる副読本に向けたさらなる検証

今回の研究では冊子形式ではなく、プリントやPDF形式でページ試案の検証を行った。そのため、副読本として完成された状態で、他ページと関連させた活用やICTと併用して活用するにはどうなのかといった点は今後検証が必要になってくる。また、検証授業を行ったのは三つの単元だけなので、他ページがどれだけ主体的に活用できるものになっているのか、来年度以降も検証授業を行い、編集に反映させていくようにする必要がある。また、学年ごとに章立てを変えたことや問題解決的な学習過程に対応したページを増やしたことが、児童だけでなく教師の活用状況の改善につながるのか、今後も検証を進めていく必要がある。

(2) 教師用指導資料の作成

今回の検証授業では小学校社会科教育研究会作成の指導計画例を用いたが、やはり副読本「かわさき」に合わせた指導計画例や資料の解説などが必要だと考える。編集の意図を伝えたり、活用方法について例示したりすることで、経験の浅い教師でも進んで副読本を活用していけるようにしていきたい。また、社会科に限らずに活用できる場面を示すことで、キャリア在り方生き方教育や教科等横断的な視点での副読本活用についての可能性を現行副読本以上に広げられると考えている。

3 終わりに

次期副読本は2023年度に発刊が予定されている。そのため、主題にある「作成・活用」という点で本研究を捉えると、途中の段階であり、十分な成果をまとめるまでには至っていない。だが、編集方針について検討を重ねてページ試案を作成し、検証授業を行ったことで、明らかになったこともある。これらを次年度以降設置が予定されている「副読本かわさき編集・執筆者会議」に引き継いでいくことで、児童が主体的に活用できる副読本「かわさき」の作成が実現されると考える。本市は2024年には市制100周年を迎える。これからの川崎市、そして社会を担う児童に、郷土に対する誇りや愛情を育むためのきっかけを与えられるよう、多様な視点で「ふるさとかわさき」を捉え、よりよい社会の在り方を問い続けられる副読本の作成を引き続き進めていきたい。

最後に、研究を進めるにあたり、ご支援、ご助言くださいました講師の先生、また校長先生をはじめ学校教職員の皆様に、心より感謝し厚くお礼申し上げます。

【参考文献】

- 澤井陽介・加藤寿朗編著『見方・考え方 社会科編』東洋館出版 2017年
澤井陽介『小学校新学習指導要領社会の授業づくり』明治図書 2018年
安野功「新学習指導要領による『地域学習』のあり方」
日本文教出版小学校社会科3・4年生用副読本作成の手引き【新訂版】 2018年
北俊夫『「ものの見方・考え方」とは何か』 文溪堂 2018年
白井俊『OECD Education2030プロジェクトが描く教育の未来』ミネルヴァ書房 2020年

【指導助言者】

- 元川崎市立小学校校長 石川 健次
川崎市立小学校社会科教育研究会会長（川崎市立菅生小学校校長） 佐藤 俊司
川崎市立小学校社会科教育研究会副会長（川崎市立御幸小学校校長） 滝口 太志
川崎市総合教育センター指導主事 鈴木 正博

【研究協力者】

- 川崎市立下沼部小学校 石崎 興一
川崎市立橘小学校 佐藤 壮太
川崎市立末長小学校 玉渕 隆信
川崎市立下作延小学校 堀越 晋
川崎市立白幡台小学校 佐藤 理絵
川崎市立下布田小学校 渡辺 直樹